
銀河英雄年代史外伝シリーズ サターン改装計画

雨霧颯太

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

銀河英雄年代史外伝シリーズ サターン改装計画

【Nコード】

N6034J

【作者名】

雨霧颯太

【あらすじ】

ヴェルナー・テンシュテットら銀河帝国軍辺境警備艦隊は宇宙海賊ドレイク討伐に彼の本拠地を攻略する。巧みなドレイクの戦闘に彼らは……

銀河英雄伝説の二次創作！

銀河英雄年代史外伝シリーズ第四作目。

第三作目のケリム星域遭遇戦も是非ご覧ください。

この物語は、らいとすたっふるール2004にしたがって作成されています。

第一話

新帝国暦二一年六月二二日、ヴェルナー・テンシュテット大佐率いるバーラト星系警備艦隊第六戦隊はヨーゼフ・アドルノ少将率いる第八戦隊とともに、「海賊騎士」サー・ドレイク討伐のために、ドレイク本拠地と思われるケリム星域付近の小惑星帯に向かっていた。

「この出兵は乗り気じゃないな」

先のドレイクとの戦闘で大破し、五月に修復を完了したサターンの艦橋で、ヴェルナー・テンシュテットは不満そうに言った。

「どうしたの？ あなたがそんなこと言うなんて珍しいじゃない」

艦隊参謀長のナオ・リヒテンシュタイン中佐が指揮シートに腰掛けて憮然としている一歳年少の相棒に言った。

「意味がない。大義がない。兵力もない。無い無いづくしで、総司令官がアドルノ少将ときたもんだ。やってられないさ」

ヴェルナーは収まりの悪い黒髪をもしかもしゃとかきながら、相棒に不満を言った。

第八戦隊司令官、ヨーゼフ・アドルノ少将はこの年、四六歳。かつては帝国軍のエリートコースを歩んでいたが三〇代半ばに不祥事を起こし、警備艦隊に左遷された経歴を持っていた。本来、軍官僚タイプであった彼は、艦隊司令官としての指揮能力はほとんどないに等しかったが、少将と言う階級に見合うための警備艦隊の中でも最大の兵力二〇〇〇隻を与えられていた。階級が上というだけならば、

納得がいくが、彼の気位の高い性格がヴェルナーを不満足らしめている最大の原因であった。

「兵力は二五〇〇。こっちが優勢だが、所詮は烏合の衆だ。統制のとれたあのドレイクに勝てるかどうか……」

指揮シートの肘掛けに肘をかけてふてくされたヴェルナーにナオは容赦なく鉄拳を浴びせた。

「司令官のあなたがそんなこと言ってどうするの。勝てる算段をしておくのが私達の務めでしょ。しっかりなさい」

いつになく弱気になっているヴェルナーをナオは自分流に励ました。作戦の初めから気乗りしていないヴェルナーだったが、ナオの一言で少しだけ元気を取り戻した。そんななか、六月二一日午後八時三〇分、作戦指揮官のアドルノ少将からヴェルナーに通信が入った。

第二話

「テンシュテット大佐。卿は後衛にあつて我が艦隊の退路を確保し、伏兵のある場合は備えよ。ドレイクは我が艦隊が仕留める」

「了解しました。しかし、相手はあのドレイクです。数の面で我々の方が優勢ですが、一〇〇〇隻程度の優勢は彼の前では数のうちには入らないでしょう。ゆめゆめ油断なさらぬよう、お願いします」

毒を精一杯のオブラートに包み込んでヴェルナーはアドルノに言った。

「今回は卿の奇術は必要ないだろう。後方にいるからと言って、我々の足を文字通り引つ張らぬように」

アドルノはヴェルナーを鼻で笑うと通信を切った。ヴェルナーは通信が切れると同時に真面目な士官の仮面を脱いで、足を思いつきり蹴り上げた。

「ふざけやがって。足を引つ張るなだど……戦艦ばかりそろえた鈍重な動きで、ヤツの艦隊運動についていけるか！」

「ヴェルナー……冷静になりなさい」

いつもはナオが熱くなり、ヴェルナーが押さえるのだが、今回は逆になっていた。ヴェルナーは指揮シートにどっかりと腰を落とし、手で目を覆った。

「ふう……俺としたことが熱くなりすぎたな。………すまない………参

謀長」

「ドレイクとの再戦ですもの。後方にいるなんて私も納得出来ないわ。ただ、アドルノ少将はドレイク討伐の功で中央に戻りたいと思っ
ているでしょうね。実際、ドレイクはその価値はあるから」

今回の出兵は先のケリム星域遭遇戦においてヴェルナーがドレイク艦隊の全貌をあらわにしたことで勝算を見いだしたアドルノ少将が自らの出世のために、司令部に直訴し無理矢理に決定させたものだった。二〇〇〇隻という兵力を有するアドルノだが、実戦経験が少ないということは自覚していた。そのため、実戦経験の豊富な第六戦隊を指名し、自らの退路の安全を図ろうとしたのだった。

ナオは腕組みして前方のアドルノ艦隊を見た。戦艦の配置も、巡航艦の配置もめちやくちゃで、お世辞にも良い陣形とは言えなかった。だが、二〇〇〇隻と言う、ドレイクを遥かに上回る兵力は侮れなかった。

「だが、兵力の差が勝敗を分ける訳ではない。奴の戦術は数をすら凌駕する。……もつとも、俺たちも同じだけどね」

指揮シートに座ったヴェルナーは、傍らに立つ相棒に笑った。その顔を見たナオはやっとヴェルナーがいつもの調子に戻ったと少し安心して苦笑まじりの微笑みを返した。

小惑星帯に光点が現れた。ドレイク艦隊が姿をあらわしたのだ。今回の戦闘に動員された兵力はドレイク側兵力、約九六〇〇隻、約九万人に対し、帝国軍側艦艇二五六〇隻、将兵二四万三〇二〇人であった。

午後九時、アドルノ艦隊は姿を現したドレイク艦隊に向けて最初の砲火をあげかけた。

第三話

「ファイエル！」

アドルノの最初の一撃はドレイク側にほとんどダメージを与えられなかった。その攻撃のほとんどが小惑星とエネルギー中和磁場に守られ、傷一つ与えることはなかったのだ。アドルノ艦隊の攻撃と陣容を見たドレイクは笑いを通り越してあきれかえっていた。

「なんだあの攻撃は？ 当てる気がないのか？ それとも、当て方を知らないのか？」

ドレイク艦隊旗艦、アストライアに据え付けられた指揮シートに座りながら、敵の最初の一撃に憤慨していた。

「若。油断は禁物ですよ」

参謀兼副官であるテオドル・アルペンハイムがドレイクに口添えした。

「心配するな。じい。この陣形を見る。戦艦の配置も、巡航艦の配置もむちゃくちゃな上、後方にある艦隊との連携もとれていないよ。うだ。数は二五〇〇隻を下らないが、勝算は十分すぎるほどある」

「はい。しからは、こんな手はいかがでしょう」

テオドルはドレイクに耳打ちをした。テオドルの案を聞いたドレイクはにやりと笑うと、艦隊の後退を命令した。

午後九時三〇分、ドレイク艦隊は小惑星帯の入り口から後退を開始した。それを見たアドルノは直ちに艦隊の前進を指示した。

「逃がすか！ ドレイクの首をとるのは我々だ」

おそらく、アドルノでなければ、こうも即決は出来なかっただろう。この後退があからさまな偽装後退であることは遙か後方のヴェルナーですら容易に想像出来た。我先に艦が前進したことで、ただでさえ隙だらけの陣形にさらに回復しようのない隙が生じる結果になってしまった。

艦隊の先頭が小惑星帯の入り口に達した時、小惑星の隙間から、おびただしい数のワルキューレとスパルタニアンの混成部隊が来襲した。

第四話

「総員、対空戦……」

前衛部隊の司令官が言えたのはここまでであった。ワルキューレとスパルタニアンは動きの遅い戦艦群や空母群を真つ先に血祭りに上げていった。突出した部隊は瞬く間に壊滅し、混成部隊はアドルノ艦隊主力に襲いかかった。主力部隊にしても艦隊運動の鈍重さは醜悪を極めた。満足な対空戦闘も行えず、互いに衝突する艦が増えていく様子をヴェルナーは苦々しく見ていた。

「何をやっているんだ！」

ヴェルナーは遙か前方にいる二階級も上の司令官に向かってあからさまな怒気を放った。ヴェルナーも救援に行きたかったが、それは至難を極めた。現在の乱戦の中ではヴェルナーの救援はさらに事態を悪化させるばかりでなく、ドレイクの主力が攻撃を仕掛けた場合、壊滅の危険も考えられたためだった。ヴェルナー率いる五〇〇隻は陣形を保ったまま、敵の攻撃の範囲ぎりぎりまで前進した。

そのころ、ワルキューレとスパルタニアンの混成部隊の攻撃でアドルノ艦隊は大混乱に陥っていた。

この戦いで生還したアドルノ艦隊の砲手の手記には以下のようなことが記されている。

「俺たちは撃った。撃って撃って撃ちまくった。だが、奴らは俺たちの一撃をひらりとかわし、かわす度に俺たちの艦隊の一隻が沈められた」

殿軍として最後衛にいたヴェルナーはその様子を齒がみしながら見ていた。

「何だ！ あのへたくそな対空射撃は！？ 敵に当てるところか、味方と同士撃ちしているものもいるじゃないか」

帝国軍警備艦隊の中でも、ヴェルナーの対空戦術の巧みさは突出していた。それだけに、いたずらに損害を出してばかりいるアドルノ艦隊を彼は許せなかった。

「落ち着きなさい。ヴェルナー」

参謀長のナオが指揮シートから立ち上がり、怒声を上げているヴェルナーの肩を叩き落ち着かせた。

「あ……ああ、すまない。参謀長。だが、なかなかどうして、こしやくな戦術だよ。宇宙暦になる前、遙か昔に航空機が戦艦を沈めたと言う例はあるが、これほどスケールを大きくして艦隊を翻弄するのは並の奴じゃ出来ない」

ヴェルナーは指揮シートに腰掛けて腕組みした。

「さすがはドレイクと言ったところね。けれど、彼はそれだけに終わる男じゃない。そうよね？」

ナオはそう言って指揮シートの司令官を見た。ヴェルナーはナオを見ることなく、前方の戦場を見つめながら言った。

「ああ、奴は必ずどこかで仕掛けてくるはずだ」

午後一時三〇分、小惑星帯からドレイクの艦隊が飛び出して来た。

第五話

海賊艦隊の艦艇のほとんどは軍による追撃から振り切るために高速の艦艇がその多くの割合を占めている。艦隊が小規模だったことも手伝って、小惑星帯から飛び出したドレイク軍は、猛スピードでアドルノ艦隊に突撃をしかけた。

「なんと言う奴だ。ランベルツ提督がいたら、舌を巻いたに違いない」

ヴェルナーはそう言うと即座に指示を出した。

「艦隊陣形を凹形陣へ。敵先鋒に火力を集中させ、アドルノ艦隊の退却への時間を稼ぐ。それから、参謀長。直ちにアドルノ少将へ回線を開いてくれ。ドレイク接近を知らせなくてはならないからな」

ヴェルナー率いる第六戦隊は急襲しつつあるドレイク艦隊に備え、直ちに陣形を変えた。そんな中、アドルノとの通信回線が開いた。モニターから見えたアドルノ艦隊旗艦カッセルの艦橋は混乱、狂躁の中にあつた。司令官のアドルノの顔は真っ赤に紅潮していた。

「アドルノ提督。ドレイク本隊が至近に迫っています。直ちに退却されるがよろしいかと思えます」

ヴェルナーは生まれて以来、最高の誠意と丁寧さでアドルノに接した。だが、アドルノはそんなヴェルナーを察しようとはせず、ただでさえ真っ赤な顔にさらに真っ赤な絵の具を塗りたくったように顔色を変えて激昂した。

「わかっておるわ！　そう思うなら、はやく来援せんか！　機を読めぬ無能者が！」

痛烈なヴェルナーへの非難にヴェルナーはアドルノをにらんだ。その眼光は鋭く、アドルノをひるませるに十分なものだった。ヴェルナーはすぐにもとの顔に戻ると、背筋を伸ばして言った。

「わかりました。これより本艦隊が援護いたします。殿軍としてドレイクの足止めをいたしますので、その隙を見て、退却をお願いいたします」

「……………うむ……………頼む」

少しづつが悪そうにアドルノは通信を切った。通信が切れると同時に、ヴェルナーはそのまま魂が飛び出るかと思うくらい大きなため息をついた。

「よくやったわよ。ヴェルナー」

ナオがヴェルナーに声をかけた。一歳の年少の黒髪の司令官は苦笑して言った。

「相手はあのドレイクだ。しかも、前回の戦いで俺たちの手の内は知られている。前はうまく事が運んだが、今回はうまくいくかどうか……………」

いつもは楽天的なヴェルナーのらしくない一言に、ナオは意外に思いつながら、胸を張ってヴェルナーに言った。

「しっかりしなさい。そのために私がいるのだから。あなたは艦隊

の指揮に専念しなさい」

ちょうどその頃、高速で移動していたドレイク艦隊は、大混乱に陥っているアドルノ艦隊を射程におさめようとしていた。

第六話

「よし、攻撃用意だ」

ドレイクは右手を上げようとしたが、参謀のテオドル・アルペンハイムがそれを止めた。

「お待ちください、若。敵の後衛に動きがありませんぞ」

ドレイクはモニターに映し出された陣形図を見て笑った。

「じい、あれは恐らくテンシュテットの艦隊だろう。味方の混戦を避け、あえて本隊の援護に入らず、我々の攻撃に備えている。なかなかどうして、大した道化だ」

「では、テンシュテット艦隊を先に片付けますか？」

「いや、それでは奴の思うつぼだ。奴の目的は崩壊した味方の陣形の再編か退却の時間を稼ぐことだ。ここで奴と戦えば、それこそ敵に時間を与えてしまうことになる。故に最初の目標の艦隊に突撃する」

アルペンハイムは一礼し、一步下がると、再びドレイクは右手を上げると、一気に振り下ろした。

「ファイエル！」

同時刻、ヴェルナー艦隊もドレイク艦隊に対し、砲撃を開始した。

「ファイエル！」

ヴェルナー艦隊の砲火がドレイク艦隊の先鋒の側面に命中し、ドレイク艦隊に多大な損害を与えた。

「ひるむな！ いかなる犠牲を払おうと前進あるのみだ！ 陣形を崩すな！」

ヴェルナーの狙いは敵先鋒に攻撃を集中させ、アドルノ艦隊残余が後退する時間を稼ぐことにあつた。だが、ドレイクはそれを看破し、艦隊に犠牲が出ることをあえて承知で突撃させた。この肉を切らせ骨を断つとも言える戦術は見事に功を奏した。

ヴェルナー艦隊の執拗な一点集中攻撃に耐え、ドレイク艦隊はそのままの速度を維持しながら、アドルノ艦隊に突入した。

第七話

「やられた!」

ヴェルナーは指揮シートから立ち上がった。もっともヴェルナーが危惧した結果であった。

「どうしたの?」

参謀長のナオがヴェルナーに尋ねた。

「わからないか? これがドレイクの狙いだっただ。一度乱戦になれば、この距離から砲撃では同士討ちしてしまう。アドルノ艦隊が絶好の盾という訳だ。それに混乱状態にあるアドルノ艦隊はドレイクにとって絶好の獲物だ。ドレイクにとっては攻守もつとも安全な状態になる」

「なるほど……」

ナオはうなずいた。

「けれど、放置しておく訳にはいかないわ。ヴェルナー、ここはアドルノ艦隊をこの宙域から脱出させないと」

「そうだな」

ヴェルナーは腕を組んで指揮シートに沈み込んだ。目の前では艦が爆発する光が瞬いていた。

そのころ、ドレイク艦隊の突撃を受けたアドルノ艦隊は狂乱、混乱、潰乱の三重奏を奏でていた。ドレイクはアドルノ艦隊を盾にすることでヴェルナー艦隊の砲火を防ぎ、アドルノ艦隊の陣形の中を縦横無尽に動き回り、アドルノ艦隊の陣形をめちゃめちゃに引き裂いた。アドルノ艦隊への突入からわずか一五分後、ドレイク艦隊はアドルノ艦隊旗艦カッセルをその射程におさめた。

「司令官！ あれを！」

アドルノの副官が指差した先には、ドレイク艦隊旗艦、アストライアがあつた。アドルノが生涯最後に見た光景は、アストライアから放たれた中性子ビームの光だった。午前〇時三〇分、アドルノ艦隊旗艦カッセル撃沈。ヨーゼフ・アドルノ少将は戦死した。

カッセルの最も近くにいた巡航艦ウエンデルよりアドルノ少将戦死の報告が入ったのは午前零時四五分であつた。

第八話

「わかった。これより、指揮権を引き継ぐ。アドルノ艦隊各艦は、現在の宙域より離脱し、これより指示する地点に集結せよ」

指揮権を引き継いだヴェルナーは直ちにアドルノ艦隊残余に撤退を命じた。だが、戦場の離脱は容易ではなかった。未だドレイクが艦隊の中を暴れ回っており、彼らが逃げ回る度に背後からアドルノ艦隊は攻撃を受けていた。ドレイク艦隊の移動パターンをいち早く察したのはナオであった。

「ヴェルナー。ドレイクは私達とも戦わねばならないはずよ。今のままの艦隊機動を続けていてはすぐに限界に達するわ。けれど……これを見て」

ナオはヴェルナーの前に位置するディスプレイに陣形図とドレイク艦隊の予想進路を表示させた。

「ドレイクはむちゃくちゃな機動をしているかのように見えるけど、実際は緩やかな円運動をしているの。あと一時間ほどで私達の正面に達するはずよ」

ヴェルナーは指をはじいた。

「なるほど。あくまで狙いは俺たちという訳か……。しかし、この戦術。過去の戦術を応用したものとは言え、運用法に隙がないな」

「過去の戦術があるから、今の戦術に通じているのよ。……それより、アドルノ艦隊の残存兵力だけけれど、ドレイク艦隊の円運動から

逆方向を描くように離脱すれば、被害は最小に食い止められるはず
よ」

ナオはアドルノ艦隊の残存艦隊へドレイク艦隊の予測進路を送り、
撤退を助けた。結果、アドルノ艦隊の残存兵力の多くが脱出に成功
した。しかし、アドルノ艦隊は司令官のアドルノ少将の戦死をはじ
め、その損害は大きく、艦隊のほぼ半数が失われ、戦力を維持して
いるのは全体の二割に過ぎなかった。ヴェルナーは残存艦隊の中で
最も階級の高かったコンラッド・フォン・ハルトヴィック中佐に残
存艦隊の臨時司令官に任命し、他の艦隊への救援要請と、警備艦隊
本部への帰投を命じた。

ハルトヴィック中佐はその命令を忠実に実行した。残存艦隊、約八
〇〇隻は無事戦場離脱に成功した。加えてハルトヴィック中佐は戦
力を維持している艦艇より、二〇〇隻を選びすぐって予備兵力とし
て後方に配置することをヴェルナーに了承させた。連携の出来てい
ない艦隊を指揮下に置くのは、ヴェルナーとしても気のすすまない
ことではあったが、数的優位がドレイク側にあるため、数を揃える
こともまた、戦況を優位にすすめるには必要な要素であったため、
ヴェルナーはハルトヴィック中佐の要請を了承した。

また、ハルトヴィック中佐もアドルノ少将とは違い、艦隊編成に非
凡な才を発揮させた。「戦艦ばかり集めた」とヴェルナーに酷評さ
れたアドルノ艦隊から高速巡航艦や、高速戦艦、駆逐艦を選びすぐ
って選び抜き、攻撃力、機動力に優れた艦隊を編制し、次に先任の
クラウス・シュルツ中佐にそれをあずけた。シュルツ中佐はハルト
ヴィックから見送るとヴェルナーの後方、約五〇〇万キロの位置に
布陣した。

第九話

「なかなか、うまいものだ。最適な位置に布陣したな」

シユルツ中佐の位置取りもヴェルナーを嘆息させた。シユルツはヴェルナーの要請があればいつでも左右展開が可能な位置に艦隊を配置したのである。ドレイクもまた、ヴェルナー艦隊の配置を見て、目を見開いた。

「やるものだ。テンシュテットもまるで隙がない」

ドレイクが円運動を終え、ヴェルナー艦隊正面についたとき、ヴェルナー艦隊はその戦闘準備を終えていた。

午前二時、ヴェルナー艦隊はドレイク艦隊に対し、二度目の砲撃を開始した。

「ファイエル！」

ヴェルナー艦隊の砲火がドレイク艦隊先鋒に集中した。

この時代において、艦隊による一点集中砲火の名手は二人存在する。一人は帝国の双璧の一人である、ハインリヒ・ランベルツ・ミッターマイヤー、もう一人がヴェルナー・テンシュテットであった。

だが、二人がこの戦術を採用したのは、正反対とも言える理由であった。ランベルツが艦隊の攻撃力を爆発的に高める、いわば積極的理由として採用したのに対し、ヴェルナーは対空艦隊としての攻撃力の低さを補うためという消極的理由から採用していた。

だが、この苦肉の策が功を奏し、ヴェルナー艦隊は高い対空戦闘能力と正規艦隊に劣らぬ攻撃力を獲得することになった。

「この前の二の舞になる気はないぞ、テンシユテット。装甲の厚い艦を前に出し、砲撃を集中させよ。中央突破して、敵を半包囲する」

ドレイクは戦艦、砲艦群を前に出すとヴェルナー艦隊中央部に攻撃を集中させた。ドレイクの凄まじい攻撃の前にヴェルナー艦隊前衛は次々と塵になっていった。

第十話

「さすがはドレイク。一筋縄ではいかない」

ヴェルナーは指揮シートに腰掛けて笑っていた。

傍らでナオはヴェルナーの笑顔を見た。いつのもおどけた笑顔ではない。好敵手と出会い、喜びを噛み締めている笑みだった。ヴェルナーもまた戦士なのだ。ナオは弟のような司令官の他では決して見せない笑顔を見つめていた。

「どうした？ 参謀長。俺の顔に何かついてるのか？」

ヴェルナーの問いにナオはあわてて返した。

「な、何でもないわ。それより、これを見て欲しいの」

ナオは現在の陣系図をディスプレイに表示させた。

「私達の兵力では、ドレイク艦隊に中央突破されてしまうわ。だから、あえて中央突破させてドレイク艦隊を左右から挟撃、その後包囲するのはどうかしら？」

ヴェルナーはナオの提案にうなずき、後衛のシュルツ中佐に連絡した。

「卿の任務は重要だ。ドレイク艦隊の鋭鋒をくいとめ、半包囲を完成する間の時間を稼がねばならない。大変とは思いますがやってくれ」

「了解しました。微力を尽くします」

シユルツ中佐は敬礼すると通信を切った。

シユルツ中佐はこの年二六歳、後ろに撫で付けた銀髪がトレードマークの士官だった。もともとは後方担当本部で事務を担当していたが、昨年警備艦隊に転属になったばかりであった。

初めての艦隊運用に関して、シユルツはことさら士官学校で教わったことの復習にこだわった。シユルツ自身、自分に艦隊運用の適性があるかどうかかわからないことを自覚していたためである。

「全艦へ。我々は他の部隊ほど実戦経験は豊富ではない。だが、学んだことを思い出せば、実戦にも勝るはずだ。総員の努力を期待する」

シユルツは自分の指揮する艦隊に檄を飛ばした。

後世の歴史家によると、シユルツの評価は「独創性と個性に欠けた指揮官」ということで一致している。このことは実際シユルツ自身も承知しており、後の立体TVのインタビューにて述べている。だが、そこにこそ、シユルツの特筆すべき点があった。

士官学校で教わった艦隊運用のマニュアルをシユルツほど完璧に再現出来た指揮官はいなかった。常に教科書通りの対応を行ったため、彼をよく知る指揮官には先手を取られたが、最終的に勝利するのはシユルツだった。

シユルツの攻守における粘りは全くと言っていいほど隙がなく、逆に相手はミスをつかれ敗北してしまうのだった。

この「艦隊運用の教科書」とも言えるシュルツを最初に評価したのはヴェルナーであった。彼は後年、アルベルト・フォン・ビスマルクを失った後、シュルツを艦隊副司令官として迎えている。

シュルツ率いる艦隊はヴェルナー艦隊真後ろに布陣し、防御を固めた。

第十一話

午前三時ドレイク艦隊は、再度ヴェルナー艦隊への突撃を開始した。

「来たぞ！ 全艦、もっともらしくあわてて後退……」

ヴェルナーの指令をオペレーターが遮った。

「両翼から戦闘艇接近！」

ヴェルナーとナオは愕然とした。このままでは移動もままならぬまま、壊滅してしまう。ヴェルナーは直ちに対空防御を命令した。ワルキューレとスパルタニアン混成部隊にビームとミサイルが殺到した。攻撃部隊はたちまちのうちに宇宙の深淵に消えていった。

第一波が全滅してすぐあとに、第二波攻撃部隊が来襲した。

「また、ヴェルナーサーカスの餌食だ。一機残らず撃ち落とせ！」

ヴェルナー指揮のもと、またも第二波の攻撃部隊は全滅したがドレイクの突撃はその速度と攻撃を緩めず、ヴェルナー艦隊に出血をしていた。ヴェルナーはシュルツに一計を預けると自軍の指揮に集中した。

ヴェルナーの指揮と両軍の陣系図を見ながらナオは言い知れぬ不安を感じていた。

「おかしいわ。敵の攻撃が単調すぎる。……まさか！」

ナオの予想は半ば最悪な形で実現することになった。

「第三波接近！」

「ヴェルナーサーカス始動！」

「だめよ！ ヴェルナー！」

第三波こそが攻撃の本命だった。ドレイクの攻撃の真の狙いは無人の戦闘艇部隊を使い、ヴェルナーサーカスの攻撃のタイミングをはかることにあつた。ドレイクは手持ちのワルキューレのすべてを投入し、ヴェルナーの対空戦闘能力をつぶしにかかったのだった。第三波の攻撃隊もまた大きな犠牲を払ったが、その大半は巧みに攻撃をかわし、ヴェルナー艦隊に襲いかかった。各艦は迎撃を行ったが、撃沈される艦も出始めた。

第十二話

「してやられたか……。くそっ！」

ヴェルナーは立ち上がり、床を蹴り上げた。

「敵機直上！」

「第三対空砲、迎撃！ 取りかじ五度！」

オペレーターの報告に艦長のミハイル・ブラウン中佐が巧みな操艦でかわした。だが、その見事な操艦を弄ぶかのように敵機は対空砲の死角に取り付き攻撃した。

「第一機関部、大破！」

「パージ！ 急げ！」

「前方に敵機！」

サターンの全天周モニターに敵機が映し出された。ヴェルナーとナオを始め、艦橋にいたものは全員死を覚悟した。その瞬間、敵機が爆散した。

「先輩！ 大丈夫ですか！？」

アルベルトが救援にやってきたのだった。アルベルト率いる六〇隻はヴェルナーサーカスを展開してサターンの周りの敵機を血祭りに上げた。

午前四時、ワルキューレを引き上げさせたドレイクはありつただけの戦力でヴェルナー艦隊に対し、最後の攻勢をかけた。ワルキューレとスパルタニアン混成部隊によって、混乱に陥っていたヴェルナー艦隊はドレイク艦隊の攻勢を支えきれず、戦線は崩壊しかけていた。ヴェルナーはナオの進言を取り入れると直ちに後退し、防御を固めたがそれもまた風前の灯火になっていた。

「どうやら、勝ったな」

ドレイクは会心の笑みを浮かべたが、その三〇秒後に打ち消されることになった。

「背後に敵艦隊。左右より敵機来襲！」

ドレイク艦隊を背後からシユルツ艦隊が攻撃を仕掛けたのだ。左右からアデナウアー率いるワルキューレ隊がドレイク艦隊に攻撃を開始した。

第十三話

「どうやら、間に合ったようだな」

ヴェルナーはずれた眼鏡を直して言った。

ヴェルナーはシュルツに空戦隊を預け、背後から半包囲させるように指令を出していた。態勢を立て直したヴェルナーはドレイク艦隊を完全な包囲下に置いた。

「おのれ……テンシュテット！」

戦術をまるまる返された形になったドレイクは歯ぎしりした。

「若！ このままでは！」

テオドルが傍らのドレイクに話した。

「わかっている！ じい。直ちに退却だ」

ドレイクはヴェルナーの包囲の中で一番薄い場所を瞬時に見抜くと攻撃を与えて瞬く間に突破した。その早業はヴェルナーですら対応が不可能だった。

「勝負は預けておく。このままでは済まさんぞ。テンシュテット！」

ドレイクはるか背後のヴェルナー艦隊を睨みつけた。午前五時ドレイク艦隊は小惑星帯の中に消えた。

「追いますか？」

シユルツがヴェルナーに尋ねた。

「いや、こちらも被害が大きい。迂闊に攻めると痛手が大きいのはこっちだ。退却するでしょう」

ヴェルナーは疲れきった表情を浮かべて言った。シユルツは敬礼すると通信を切った。

「完勝ね。ヴェルナー」

ナオは疲れきった司令官によく湿ったタオルを渡した。ヴェルナーは眼鏡を外して顔にかけると、指揮シートにもたれかけて金髪の相棒に言った。

「いや、痛み分けさ。ヴェルナーサーカスが破られた。このことは大きい。なんとか今回は退却させたが、次は勝てるかどうかかわからない」

新帝国暦二二年六月二二日午前一〇時、ヴェルナー艦隊は戦闘終了を宣言し、バーラト星系警備艦隊司令部へ向けて進路を向けた。

第十四話

新帝国暦二一年七月七日、ヴェルナー・テンシュテット率いるバーラト星系警備艦隊第六戦隊はバーラト星系第八番惑星ガレスにある警備艦隊基地に帰投した。

惑星ガレスはノイエラント行政府のある惑星ハイネセンから一週間の距離にあり、平時には補給、整備基地。また有事には前線基地となる帝国軍の軍事上の拠点の一つであった。宇宙港には最大二万隻規模の艦隊が駐留可能であり、現在はバーラト星系外縁部を警備する警備艦隊約六〇〇〇隻が常駐していた。

また、ガレスは観光惑星としての側面を有し、美しい砂浜とこの惑星独自の大理石室な岩盤による風景がハイネセンのみならず、遠く帝都フェザンからも観光客を集めていた。

ヴェルナーの旗艦、サターンは傷ついた船体を引きずるようにして軍用港に接舷した。

タラップから降りたナオはサターンの傷ついた船体を見やると、隣にいた相棒に話しかけた。

「これから、どうするの？」

「そうだな……海で泳ぐか」

ヴェルナーの突拍子もない一言にナオはあきれかえって言った。

「そうじゃないでしょう。艦の修理に、戦術プランの練り直し。や

ることは山積みじゃない。何考えてるの？」

「今は少しだけ戦いのことを忘れたいんだ。まずは取り合えず身体と頭を休むことを考えよう」

そう言っつてヴェルナーはタラップを下りていった。ナオは腰に手をあてると小さくため息をついた。

次の日から一ヶ月、ヴェルナー率いる第六戦隊に休暇が与えられた。今回の戦闘で艦艇の大半が修理を必要とし、組織だって訓練やパトロールが不可能なためであった。

翌日、ナオはヴェルナーの公舎の前にいた。タラップを下りたときのヴェルナーの様子が心配になり、気晴らしに外へさそうと考えたのであった。

ナオは呼び鈴を押したが家主は全く出る様子なかった。

第十五話

「変ね……どうしたのかしら」

ナオが所在なく玄関の前で立っていると、隣の家からナオと同じくらしい女性が現れた。

「あれ？ 参謀長じゃないですか？」

アデナウアーの妻の MARIA であった。アデナウアー家とヴェルナーの公舎は隣同士で、独り身のヴェルナーはよくアデナウアー家の食卓に呼ばれていたのだった。

ナオもまたアデナウアー家とは仲がよく、ヴェルナーと共に夕食やパーティーに呼ばれることもなくしばしばだった。

「おはよう。MARIA。ヴェルナーが出ないのだけれど、どうしたのかしら」

「司令官なら、朝早く出られましたよ」

「どこに行ったかわかるかしら」

「さあ……。軍服を着ていらっしやっただわね。それより、参謀長。そんなにおめかししてどうしたんですか？」

MARIA はナオの姿を上から下までじっくり眺めた。白いワンピースに帽子。普段の軍服からは想像もつかない女らしい格好であった。

「え？ あ、あのこれはうさばらしにヴェルナーを誘おうと思っ
て、その……」

「デートですか？」

マリアはいたずらっぽい笑みを浮かべてナオをからかった。年不相
応にナオは恋愛の話に弱く、真っ赤になってしまった。ナオはこれ
以上からかわれてはまずいと考え、戦術的撤退を実行した。ナオは
足早にヴェルナーの公舎を離れていった。

ナオはヴェルナーの行き先が気になっていたが軍関係の施設は広く
ヴェルナーの居場所を特定するのは難しかった。ナオ自身も昨日自
分のオフィスに忘れていたものを思い出し、基地へと向かった。

第十六話

そのころ、ヴェルナーはサターンが修理されているドックの中にいた。旗艦であるサターンの損害状況を知るためであった。

「直りそうか？」

ヘルメットをかぶったヴェルナーは整備主任に尋ねた。

「直すには直せますが、いかんせん古い艦ですしね。また出撃すれば無事は保証出来ませんよ」

「そうだな……」

ヴェルナーは自分の旗艦を見上げた。戦艦サターンはリップシュタット戦役前後に建造された標準型の戦艦で、この時代においては機関出力、武装、どれをとっても旧式化していた。現在は帝国軍は新型の標準戦艦の配備を進めており、このサターンも退役の運命にあった。

今回サターンが受けた損害は思ったほど深刻なものであった。

三つある機関部の一つが大破、脱落し、艦体表面の各部には銃撃のあとが見られた。対空砲や副砲など武装の被害も甚大で、その半数以上が使用不能になってしまっていた。

整備主任は頭を抱えた。

「武装も機関も全交換ですからね。ハイネセンのドックに行けば傷

ついた艦は少ないのでここよりは早く修理出来ますが、ここでは丸一年は見ないと……私は退役をすすめますよ」

「そうだな……自力航行出来るまでの修理を頼む。それなら早いだろう?」

「ひと月あれば大丈夫ですよ。それで、どうするんですか?」

「俺に考えがあるんだよ」

ヴェルナーはいたずらっぽく笑って、整備主任と別れた。ドッグから出ようとした時、ヴェルナーは白いワンピースの美女とぶつかった。

第十七話

「申し訳ありません。よそ見をしていたもので……。ナオさん？
こんなところでこんな格好で、何をしているんだ？」

「ヴェルナー！？ これはこっちの台詞よ」

二人はこれまでの事情を話すと、ヴェルナーの執務室に向かった。

「改装！？ サターンを!？」

ナオはヴェルナーの思いつきに仰天した。

「ああ、今回だけにとどまらず、海賊たちとの戦いは対空戦に軸
が移っていくだろう。この間サターンがワルキューレにやられたの
は対空砲の死角を突かれたためだ。だから、戦艦の巨体と火力、装
甲を活かした死角のない対空戦艦をつくろうと思うんだ」

「けれど、それなら戦艦を新造すれば良いことだし、新型の戦艦も
配備されているわ」

ナオはヴェルナーに反論した。

「まだ、今の戦艦では不十分だ。確かに対空能力は上がったが、海
賊たちの機動に完全に渡り合えるほどではない。それに今から戦艦
を設計し直しては、期間がかかりすぎてしまう」

「それで、開発費と開発期間を浮かすために改装……。ね。たしかに
案としては良いけれど、予算が下りるかしら」

ヴェルナーは満面の笑みで相棒に答えた。

「大丈夫。持つべきものは親友だよ」

第十八話

「だめ」

軍務省ノイエラント後方担当本部長のフランツ・フォン・シュタイエルマルク中將はFTL越しに冷然と言い放った。

士官学校時代の親友の痛烈とも言える一言に、ヴェルナーは身を乗り出して言った。

「そんな……。おこずかいをせびりに来た子どもじゃあるまいし、もう少し言い方があるだろう」

「おこずかいをせびる子どもだろうが。いつもいつもミサイルとチームの大盤振る舞いしやがって。他の艦隊の何倍の予算をとっていると知っているんだ!？」

ヴェルナーサーカスの難点は通常の艦隊よりもミサイルとエネルギーの消費が激しいことだった。そのため、ノイエラントの補給、会計の総責任者である彼は、予算の上では問題児であるこの艦隊に、常日頃から頭を悩ませていた。

「予算に見合う戦果は残して来たつもりだ。それに、この艦隊は星間警備艦隊に必要なものだと思うんだ」

ヴェルナーはフランツに対空戦艦の必要性を長々と説いた。小型高速艦艇の機動性を前に戦艦が対応出来なくなっていること、新たに新型戦艦を開発する期間と予算を改装によって節約出来ること。ヴェルナーは予算、戦略両面から、最大の難敵を切り崩しにかかった。

フランスはヴェルナーの話を聴きながら対空戦艦が戦局に及ぼす影響を軍官僚として冷静に分析し始めていた。

新帝国が誕生して二〇年あまり、おおむね政治は安定し、表面上は平和であったが未だ辺境星域は不安定で星間警備艦隊の増強は急務であった。しかし、その実情とは反対に星間警備艦隊には旧式艦が数多く配備されていた。

また、ヴェルナーの指摘した通り、戦艦の損耗率が高いこともフランスの頭痛の種であった。戦艦は装甲、火力は申し分無いが、反面鈍重、巨大で、隙をつかれた海賊に撃沈されたり、捕獲されたりすることが多々あった。

多大な費用をかけて建造された戦艦をのきなみ失われるのは帝国にとって手痛い損失であり、今回のヴェルナーの案は戦艦一隻には高いものであったが、後に与える影響を勘案すれば、おつりが来るほどであった。

「わかった。予算を出してやる。これは貸しだからな。覚悟しておけよ。とりあえず上申書を提出してくれ。本省にも確認をとらなければならぬからな」

「ありがとう。フランス。持つべきものはやっぱり心優しき親友だな」

ヴェルナーはフランスに向けて子どもっぽい笑顔を向けて礼を言った。

「よく言うよ。どのみち、お前はハイネセンに長期出向になるな。」

リヒテンシュタイン先輩と艦長のブラウン中佐もそうだ。休暇明けに辞令を出しておく。それから、ハイネセンに着いたら、リヒテンシュタイン先輩を連れて俺の家に遊びに来い。家内と娘がお前達に会いたがっているんだ」

「わかった。ハイネセンに行ったらそうさせてもらおうよ。それじゃ」
そう言って旧友二人はFTLを切った。

第十九話

翌日、ヴェルナーは上申書の作成に取りかかった。ヴェルナーは艦隊の主立った人間、ナオ、ブラウン、アデナウアー、アルベルトら呼び、サターンの改装箇所について話し合った。五人は夜を徹して研究しあい、二日後提出する上申書が完成した。ヴェルナーは眠気まなこをこすりながら、フランツに提出した。フランツは、すぐさま上申書を軍務尚書エルネスト・メックリンガー元帥へと送った。

上申書に目を通したメックリンガーは対空戦艦の必要性をすぐに理解し、特別予算を承認すると同時に、来年度予算に警備艦隊関係費を増額させた。この一件で、初めて帝国軍首脳部の記録にヴェルナー・テンシュテットの名前が刻まれることになる。

良報がヴェルナーの元に舞い込むのはフランツに予算を要求してから二週間後のことだった。

新帝国暦二一年八月一五日、応急修理を終えたサターンはハイネゼン宇宙港に到着した。ナオにとっては半身とも言うべき友人を失った場所であり、軍務がない限りは決して自分から訪れることのない場所だった。今回、第六戦隊首脳部からは、ヴェルナー、ナオ、ブラウンの三人が出向の辞令を受け取っていた。三人はハイネゼン上陸早々、バーラト自治政府軍統合作戦本部戦術研究部長ハーヴェイ・ウォールバンガー、バーラト自治政府軍士官学校長エドワード・マディガン両中将からの出迎えを受けた。

ハーヴェイ・ウォールバンガー中將は現在バーラト自治政府軍統合作戦本部戦術研究部長の要職にあり、自治政府軍の艦隊戦術立案の総責任者であった。どんな任務でも冷静に、冷徹にこなしたことが

ら「アイスマン」ウォールバンガーの異名を取り、一兵卒の叩き上げでありながら、四〇代半ばにして中将の地位まで出世していた。

また、軍官僚、艦隊司令官と軍人として様々な顔をもつハーヴェイであったが、彼の本質は砲術家であったと言える。艦や戦闘艇の構造を知り尽くし、その急所を的確に狙ったピンポイント射撃は弟子のヴェルナーにも受け継がれていた。

ヴェルナーは師であるハーヴェイに敬礼した。

「ご無沙汰しています。ハーヴェイ閣下」

「壮健そうで何よりだ。貴官らの活躍は聞いているぞ」

ハーヴェイは返礼すると、ヴェルナーに言った。

「そうだそうだ。この間、お前さんらがドレイクを撃退した時など、仕事を放り出して俺のオフィスまでやって来たぐらいだからな」

マディガンが人懐っこい笑顔を浮かべてヴェルナーに言った。親友の態度にひとにらみすると、ハーヴェイはマディガンを制した。

「エド。ここは公式の場だ。そのような態度は後回しにしたらどうだ」

「おいおい。久々の再会に公式も非公式もないだろう。少しは素直になるのも可愛いものだぞ。ハーヴェイ」

親友の手痛い反撃にハーヴェイはひとつ咳払いをした。さらにハーヴェイに絡もうとするマディガンからわかれ、ヴェルナーたちを工

廠に案内した。ハーヴェイは歩きながらヴェルナーたちに言った。

「サターンの改装案は私も読んだ。対空艦としては恐らく最高の艦になるだろう。今回は私もアドバイザーとして計画に加わるように命令を受けている」

「対空戦の元祖の閣下が加われば、千人力です」

ヴェルナーは少し頬をかきながら師に言った。

「私にも実現してみたいアイデアがあつてな……」

ハーヴェイが話し終わらないうちに手前の研究室の扉が爆発して弾けとんだ。

第二十話

「な！」

ヴェルナーは驚くと同時に中にいる人を助けるべく、駆け出した。ナオとブラウンもそれに倣った。黒い煙の中から、一人白衣を着た女性が姿を現した。ヴェルナーは駆け寄ると女性を助け起こした。

「大丈夫ですか!？」

「ごほつ……ああ、すまないな」

すすにまみれていたが、年若く金髪の線の細い美女だった。研究者はヴェルナーを見ると、少し頬を赤らめた。

「またか。いったい何回専門外の研究で爆発を起こせば気が済むんだ」

ハーヴェイはその研究者を知っているようであまり息まじりに言った。

「科学者にとって爆発はロマンだ。ハーヴェイ。石頭のお前にはわからん」

すすを手で払いながら、研究者は言った。ハーヴェイより遙かに年少であるはずなのに、ハーヴェイに敬語を使わない態度にヴェルナーは驚いたが、規律に厳しいハーヴェイがそれを許していることにも驚いていた。すすを払い終えた金髪の美女はヴェルナーを上から下までじっと見て言った。

「名前はなんと言っ」

「申し遅れました。帝国軍バート星系警備艦隊第六戦隊司令官、ヴェルナー・テンシュテット大佐です」

ぶしつげな質問にと惑いながらもヴェルナーは答えた。

「ヴェルナーか……。私はクリスティーナ・スタッフォード技術少将だ。お前に惚れた。結婚してくれ」

「はい……は？」

第二十一話

「な！」

ほとんど反射的に答えたヴェルナーだったが、内容を反芻して耳を疑った。もっとも、当の本人より驚いていたのはヴェルナーの後ろにいたもう一人の金髪の女性士官であった。

「な、何を言っているの！？ そんなのだめに決まっているじゃない！」

金髪の女性研究者はヴェルナーのそばを離れようとせず、ナオに言った。

「なんだ？ お前は？」

「ナオ・リヒテンシュタイン中佐。第六戦隊参謀長よ」

「それで？ お前とヴェルナーは恋人同士なのか？」

金髪の女性科学者の率直な問いにナオは頬を赤らめながら返した。

「た、ただの仕事上の相棒よ！」

「なら、私がヴェルナーと結婚しても何ら問題はないだろう。それにヴェルナーは『はい』と言っただぞ。なあ、ヴェルナー？」

そう言うと美人科学者はヴェルナーのそばに寄り添った。

「はは……。はあ……」

あまりに急な展開にヴェルナーの思考と状況は一光年の開きがあるように思われた。事実、この場で理性を正常に働かせることが出来たのは、ハーヴェイだけであった。ヴェルナー艦隊随一の常識人と言われる、サターン艦長のブラウン中佐でさえ、この時ばかりはヴェルナー同様、思考を宇宙の深淵において来たかのような表情をしていた。

「ちょっと！ ヴェルナーから離れなさい！」

金髪の参謀長はその長い金髪が天に昇るかと思うくらいの怒気をヴェルナーにくつついている白衣の美女に向けた。だが、そんなナオを意に介すこともなく金髪の美女はさらりと言った。

「確か、貴官は中佐だったな。中佐が少将である私に意見するとは不見識極まると思わんか？ それに私に何かした場合は私が貴官を告発するかもしれんのだぞ？」

「な！」

ナオは言葉に詰まった。相手の方が階級が上だったために言い返すことが出来なかった。ナオはただ、にらむことしか出来なかった。

白衣の美女は肩をすくめるとヴェルナーの腕を抱きしめた。ヴェルナーの腕に豊満な胸が密着する形になった。クリスの直接的なアプローチに、青年司令官は頬を赤らめた。

「ああ、恐いことだ。ヴェルナー。あんなに怖くて、とうの立った女より私の方が良いだろう？」

「あ、いや、その閣下……」

「閣下ではない。クリスだ。私達は恋人同士なのだからな」

ヴェルナーはクリスの直球とも言える態度にただたじろぐだけだった。ヴェルナーはとにかくこのとんでもない時間が過ぎ去ってしまったことを願い、様子見を決め込もうとしたが、それは逆に金髪の相棒を怒らせる結果となった。

「ヴェルナー！ あなたもあなたよ。もっとしゃきつとしないからおかしな女に捕まるのよ！」

「は、はい！」

ヴェルナーはナオの剣幕に押され直立不動の態勢になった。その様子にクリスは一瞬目を丸くしたが、次の瞬間には笑っていた。

「男に八つ当たりとは、怖い女だな。あんな女ではなく、私を見る。ヴェルナー」

そう言うと、クリスはヴェルナーの首に腕をまわし背を伸ばすとヴェルナーに口づけをした。

第二十二話

「んむ！」

「な……！」

長い長い。恋人同士のキスだった。その時の様子を、戦艦サターン艦長ブラウン中佐は手記にこう書いている。

「あの時ほど、私はこの世に生を受けたことを後悔したときはなかった。わずか一歩だけ前にいる参謀長の殺気が司令官と美女を除く宇宙工廠全体に解き放たれていたのだから。一秒が一日にも感じるその重圧の中で、私自身が失神しなかったのは、まさに奇跡と呼ぶ他はなかっただろう」

クリスはゆっくりと唇をはなすとヴェルナーを現世へ呼び戻した。

「閣下……。なにを……」

ヴェルナーがナオの存在に気づいたときには、ナオはヴェルナーに背中を向けていた。

「行きましょ。艦長……」

そう言うと、ナオとブラウンは廊下の彼方に消えて行った。ハーヴェイは深いため息をつく、ヴェルナーに言った。

「あとで、リヒテンシュタイン中佐のところに行ってやれ。今回のことはお前も悪いのだから。自己紹介は明日にする。お前も、自

室に戻り休んでおけ」

ハーヴェイもまた、別の廊下に消えて行った。かくして、廊下には奇妙な二人連れが残されたのだった。

第二十三話

「あははは。そいつは、災難だったな、ヴェルナー」

事の顛末を聞いた、帝国軍ノイエラント後方担当本部長、フランツ・フォン・シュタイエルマルクは破顔した。

「笑い事じゃないぞ、大変な目にあっただからな」

ヴェルナーは不機嫌と疲れを顔に貼付けた表情で返した。廊下に取り残されたヴェルナーは自室までの撤退に過去最高の努力と苦心を費やさなければならなかった。彼は妻として、夫の自室に行くのは当然だと言つて譲らぬクリスをなんとか追い返し、ようやくベッドに潜り込む事に成功した。一時間ほど仮眠をとった後、ようやくフランツと話せるくらいまで精神的疲労が回復した。

「ナオさ……いや、参謀長は本気で怒るしな……」

今年、三十一歳になる若き青年司令官は親友の目の前で頭を抱えた。

「そもそも、はっきりしないお前が悪いぞ、ヴェルナー。お前、リヒテンシュタイン先輩のことをどう思っているんだ？ お互いいい年だ。そろそろいっしょになったらどうなんだ？」

「俺たちはそんな関係じゃないよ。フランツ。だが、学生の頃から気持ちは変わっていないつもりさ」

「なら、さっさと言っ飛ばしてしまえ。でない、後悔する事になっても知らんぞ」

ヴェルナーはフランツの申し出に返事はしたが、結局、ヴェルナーが人生最大の勇気を振り絞るまでにあと四年の歳月を必要とする事になる。

ヴェルナーは学生時代より、ナオに対して思慕の情を抱いていたが、その思慮深い性格故に感情を自己完結する事にのみ時間を費やしてきた。ナオより幾分世慣れたヴェルナーだったが、やはりこのような恋愛話には水準以上に疎かった。

ナオもまた、ヴェルナーには後輩以上の感情を抱いていたが、エルザを失って以来、輝きを失った心に光を取り戻してくれた存在として、誰よりも大切な人間である事はナオも自覚していた。

しかし、反面、ナオもまたその聡明な性格故にヴェルナーをあくまで弟のような存在として見る事で自分の感情を抑え、制御してきたつもりだった。

お互いが微妙な均衡を保っているかに見える関係であったが、周囲にはお互いの気持ちは火を見るよりわかりきったものであり、二人の行く末がどうなるかにやきもきしていた。

フランツもまたその一人で、ことあるごとにヴェルナーとナオに付き合う事を勧めているのだった。

「お前、変わったよな。士官学校の頃はお前が逸って、俺が止めていたのに逆になってしまった」

ヴェルナーは少しさみしげなまなざしでフランツを見た。

「結婚すれば、男は変わるさ。お前もいずれわかる。守るってことがどういふものかをな」

FTLの後ろで、フランスの妻が夫を呼んだ。どうやら夕食の用意ができたらしい。

二人は再会を約束すると、FTLを切った。ヴェルナーはベッドに身を委ねた。機能性を何よりも重視するバーラト自治政府軍だけあって、その寝心地は抜群だった。

事態が少しでも好転して欲しい。そう願いながら、ヴェルナーは再び眠りの世界に落ちていった。

第二十四話

翌、八月一六日、午前七時を告げるけたたましいブザーの音にヴェルナーは目を覚ました。

普段は朝の弱いヴェルナーであったが、このときばかりは目を覚まさずにはいられなかった。ヴェルナーの隣には下着姿の美女が眠っていたのだから。

「か、かかか……閣下!？」

目覚ましの音で美女も目覚めたようで、ゆっくりと身体を起こすと、背を伸ばした。

「おはよう。ヴェルナー。良い朝だな」

ヴェルナーの困惑をよそに下着姿のクリスはヴェルナーに目覚めの挨拶をした。

「なぜ……ここに？」

「私の専門はコンピュータなんだ。この程度のロックを解除するのに一分もかからん」

クリスは豊かな胸を揺らして、自慢げに胸を張った。ヴェルナーはクリスから目をそらした。

「ともかく、服を着てください。こんなところを参謀長に見られたら……」

ヴェルナーが言うが早いか、自室のブザーが鳴った。

「ヴェルナー？ 早く起きなさい。ミーティングに遅れるわよ」

呼び鈴の相手はナオだった。ヴェルナーは生まれて初めて、血が引いていく音を体の中に感じた。

第二十五話

「何だ？　こんな朝早くに無礼な奴だな」

そう言つて、クリスは下着姿のまま玄関まで歩いていった。ナオが二回目の呼び鈴を鳴らすと同時に、ドアが開いた。ナオの目の前には下着姿のクリスがいた。ナオは奥の方に目を向けると、そこにはやはり下着姿のヴェルナーがいた。

聡明なナオならずとも、この二人に夕べなにかあつたかは容易に想像出来た。ナオはヴェルナーとクリスに向けて、冷徹な目でひとにらみするとぼつりつぶやいた。

「最低ね……」

言い終わると足早にヴェルナーの私室から離れていった。

「違つんだ！　ナオさん！」

自分が下着姿である事も構わずに、ヴェルナーはクリスをはねのけ、廊下に躍り出たが、すでにナオの姿はヴェルナーの視界から消えていた。

「どうやって、今日ナオさんと会えばいいんだ……」

ぼさぼさの寝癖頭のままヴェルナーは顔を押しさえた。先輩、悪友から教わつた全ての悪知恵を総動員しても、ナオの誤解を解くのは不可能であつたらう。そんなヴェルナーの苦悩も知らずに後ろからクリスが抱きついた。ヴェルナーの背中にクリスの胸の感触が伝わ

ってきた。ヴェルナーはかぶりを振って、クリスを自分の身体から引きはがした。

「閣下。早く服を着てください！ 私も遅刻してしまいます」

「心配はいらないぞ。ヴェルナー。改装の責任者と改装の立案者がそろっていないければ、会議は始まらないだろう」

「……え？」

第二十六話

「今回、改装を担当する、クリステイーナ・スタッフォード技術少将だ」

ミーティングの席で、ハーヴェイが少し仏頂面になりながらクリスを紹介した。

「彼女の専門はコンピュータで、今回サターンに搭載する新型コンピュータの開発者だ。むろん、コンピュータだけでなく、艦船設計にも通じている」

ハーヴェイの紹介に、ナオが真つ先に反発した。

「コンピュータが専門ですって？ 脳みそだけ賢くても、強い艦でなくては、改装する意味がないわ。改装責任者の更迭を要求します」
辛辣を塗り重ねたナオであったが、ハーヴェイに制された。

「口を慎め、リヒテンシュタイン中佐。貴官はサターンの艦長でもなければ、戦隊司令官でもない。先ほど、彼女が艦船設計に通じているのはすでに話している。この工廠、いや、ノイエラントにおいて彼女ほど適任者はいない」

ナオはハーヴェイの正論に口をつぐんだ。ヴェルナーやブラウンに比べ、こと艦レベルの問題においては、自分が中途半端な存在である事は自覚していたし、何より、自分がクリスに対して感情的になっている事もまた否定出来ない事であった。

ナオはうつむいた。

驚いた事に、ハーヴェイをいさめたのはクリスだった。

「まあ、ハーヴェイ。リヒテンシュタイン中佐は私の設計した艦を見た事がないようだ。ついてこい。いいものを見せてやろう」

そういうと、クリスはあるドックに一同を案内した。クリスが扉を開けると、そこには見た事もない戦艦があった。サターンよりも一回り大きく、盾艦らしきものまで装備した巨体を前に、一同は皆、言葉を失った。

第二十七話

「帝国軍上級指揮官用旗艦級戦艦、グロス・アドミラルス級だ。これはその一番艦。名を、ウイリバルト・ヨアヒム・フォン・メルカッツと言つ」

ウイリバルト・ヨアヒム・フォン・メルカッツ。旧帝国、旧同盟の科学者がお互いの設計の長所をまとめあげて完成させた最新鋭戦艦で、昨年ケルン反乱鎮圧の功で昇進したロバート・ウエブスター大将の旗艦となる予定だった。

帝国と同盟、どちらも兵器の目的は変わる事はない。人を殺す事、その一点において有史から兵器は進化を遂げて来た。

だが、その進化は必ずしも一方向のベクトルを持っているとは限らない。帝国と同盟の軍事技術は、細部において相違点が多く見られ、その技術的融合は困難を極めた。

新帝国開闢より二〇年あまりを経た今も軍事技術における融合がなしえなかったのにはこのような背景があった。

クリステイナ・スタッフォードはその融合の壁を打ち破った最初の科学者だった。彼女は、その技術的融合をコンピュータと言つ、最も困難な部分からアプローチする事でやってのけたのだった。

彼女は艦を統括するコンピュータシステムを作り上げ、それに個々の技術を追随させるという形で帝国と同盟の技術を融合させる事に成功した。

彼女の目の前には、彼女の苦心の結晶と言つべきものが存在していた。

クリスは自分が設計した艦を撫でた。その彼女の後ろにいた一同はそのときの彼女の表情は容易に想像できた。ナオはクリスの前に出て頭を下げた。

「重ね重ねの失礼、お許しください。スタッフフォード技術少将」

クリスは笑うと、手を差し出した。

「クリスでいい。私にあんな口をきいたのはハーヴェイ以来だ。私はお前が気に入ったぞ。中佐」

「私の方こそ、ナオでお願いしますわ。クリス」

そう言うと、二人は握手をした。

「一時はどうなるかと思いましたが。司令官」

ブラウンが隣のヴェルナーに話しかけた。

「ああ、まあな」

ヴェルナーは頷いた。

会議室に戻った一同は改めてクリスから今回の改装プランの青写真を提示された。

第二十八話

「これは……。すごい……」

ヴェルナーらの具体的にまとめられた改装案をもとに、クリスとハーヴェイがさらに知恵を出したサターンの完成予想図は彼らの想像の遙か上をいつていた。

ヴェルナーらが改装案として提出したのは対空砲の増設とその配置位置、主機関の換装、戦術コンピュータのアップデートであったが、クリスはそれに完璧に応えただけでなく、サターンの艦型を変えてサターンの防御力を高めさせていた。

クリスはサターンの艦の大きさに目をつけ、改装と追加武装が容易な艦であると直感し、既存の技術を応用する事で旧式艦を見事に新鋭艦に生まれ変わらせたのであった。

まず彼女は、サターンの主機関を最新鋭の高速戦艦である、ハノーバー級のそれに換装した。ハノーバー級はサターンより幾分小ぶりの艦体を持っていたため、換装はより簡単に、そして短期間で終了する事が出来た。

その効果は設計期間、予算の短縮だけでなく様々な効果をもたらした。主機関を変えた事により、サターンの出力は以前の1.8倍に上昇しただけでなく、生産性に優れたハノーバー級は、新帝国暦二年現在において各星系の基地や正規艦隊に配備が開始されており、数年後にはどの基地からも補給や部品の供給ができるようになるだろう。

また、向上した出力は武装だけでなく速力にも貢献した。ありあまる出力は比較的鈍足の戦艦であったサターンに高速戦艦にも準じる速力をもたらしした。

次に彼女は、自分の専門であるコンピュータのアップデートに取りかかった。サターンがもとも大きな艦体であること、技術革新により、コンピュータなどの精密機器の小型化に成功した事もあって、演算速度、他のコンピュータとの相互リンク能力に優れた新世代コンピュータを試験的に搭載した。

これによって、より詳細な戦況把握が可能になり、戦況の急激な変化に対応する柔軟な戦術指揮が可能になった。これは綿密で精密な艦隊運動を必要とするヴェルナーサーカスに絶対不可欠なものだった。

速力、武装、コンピュータ。これだけの性能を向上させたサターンでも、ヴェルナーらは満足であつたらう。

事実、ヴェルナーらが夜を徹して考え抜いた改装案はここまでであつた。

だが、クリスとハーヴェイは二度のサターンの損傷に着目し、サターンに代表される旧式の標準型戦艦の弱点が大きく張り出した機関部である事を見いだした。彼らは思い切つて機関部を撤去し、艦体を延長して、そこに主機関を搭載し、避弾性能を向上させた。

この向上策によって、前方からの砲撃に対する防御力と大気圏内の空力安定性をもサターンは確保したのであつた。

「以上が私のプランだが、どうだ？」

説明を終えると、クリスは一同を見回した。ハーヴェイは満足そうに頷き、ナオもブラウンも言葉に出さなかったが改装後の姿を心待ちにしているようだった。

「すごいなクリス！ 完成はいつになるんだ！？ ……その、閣下」

ヴェルナーが子どものように身を乗り出して、クリスに言った。途中で自分の態度が大人げない事に気づいて気恥ずかしそうに自席についた。クリスはその様子を見て、優しく微笑んだ。

「やっと、名前で呼んだな。ヴェルナー。ほとんどが開発済みのもので、部品も完成品でそろっている。あとは取り付けるだけだから、さほど時間はかからない。四ヶ月もあれば終わるだろう」

それから四ヶ月、彼らは各々の仕事に最善を尽くした。

第二十九話

フェザンにある軍務省航空工学研究所。ここでは新型ワルキューレの開発が行われていた。ワルキューレもマイナーチェンジがこの二〇年でなされていたが、ついに本格的な開発が行われることになった。

新帝国暦二〇年、試作機が初飛行に成功し、翌年量産が開始される事が決定した。フェザンの工廠では先行量産型約三〇〇機が翼を並べていた。

新型ワルキューレの開発責任者、ギンター・ローゼンベルグ技術少将は会心の笑みをもらった。

「壮观だな。私のつくったワルキューレたちが宇宙を飛び回る姿を想像するだけでわくわくするものだ」

ギンターが新型ワルキューレの流麗な機体を眺めていると、助手のヘルベルト・グーテンベルク技術大尉が駆け寄って来た。

「大変です！ 室長！ あのスタッフオードが対空戦艦を開発しようです」

「あの女が！？ よりにもよって対空戦艦とはな。だが、戦闘艇で沈められないものはないということをあの高慢な女に思い知らせてやるとしよう！」

ギンターは自信満々に言った。ギンターとクリスはこの二、三年ライバル関係にあり、何かと対立していた。もっとも、クリスに

はそうは映ってはおらず、ギョインタールは小物以下にしか見られては
いなかった。

クリスには小物にしか見られていなかったが、実際のところ、ギョ
インタールの科学者としての腕は超一流であった。

彼はグロス・アドミラルス級の設計者の座をクリスから奪われてい
たが、その代わりとして新型ワルキューレの開発者に任命され、彼
はその開発に奔走することになった。彼の開発したワルキューレは
極めて完成されたもので、武装、運動性能ともに以前のワルキュー
レと段違いの性能を有していた。

彼は軍務省の知己に頼み、戦艦サターンの完成予定日を聞き出し、
軍務省教導訓練部長、カール・フォン・ブランデンブルグ中将にサ
ターンとの合同訓練を申し出た。その内容とギョインタールの動機はあ
きらかに見え透いたものであり、内心カールはあきれ、ギョインタール
を門前払いにしようとしたが、今後の対空戦艦とワルキューレの重
要性を考えると、突っぱねる訳にもいかず、彼はギョインタールの提案
を了承した。

訓練の日取りは新帝国暦二一年二月二四日に決定され、そのこと
はヴェルナーらにも伝えられた。

第三十話

「あの小物め！」

クリスは命令書と訓練内容を見るなり、命令書をくしゃくしゃに丸めて、ダストシュートに投げつけた。

「どうしたの？ クリス？」

ナオがクリスに話しかけた。普段人を食った態度を崩さないクリスが激昂したした姿を一同ははじめて見た。

「ギンター・ローゼンベルクと言う、私を目の敵にしている馬鹿がいてな。そいつが我々との合同訓練を提案したらしい、一二月二四日、対空戦艦と新型ワルキューレ三〇〇機で模擬戦闘訓練を行うぞうだ」

長く伸びる金髪を後ろに束ねた美人科学者はホワイトボードを背もたれにしていった。

「三〇〇機は相手に不足はないが、弾数が心もとないな」

ヴェルナーは腕組みをした。改装をしたサターンは単艦でも十二分に渡り合えるだけの能力を獲得していた。腕組みは彼なりの自信の現れだった。

「そうね……」

ナオも考え込んだ。

「おい、お前たちは単艦で三〇〇機と渡り合うつもりなのか？」

クリスが驚いた様子で二人に尋ねた。

「違つもの？」

「違つのか？」

二人は同時にクリスに返した。クリスはあきれ顔で言った。

「艦隊を二〇隻ほど連れて来てよいそうだ。お前たちの剛胆さには恐れ入るな」

書類で読んで、クリスはヴェルナーらの腕とサターンの性能は熟知しているつもりだったが、実際の彼らはクリスの想像の上を行っていた。

「まあ、まだ時間がある。戦術も訓練での作戦もじっくり考えていくとしよう」

そう言って、クリスはミーティングを解散した。クリスはすぐにヴェルナーの腕に飛びつき、部屋へと促した。

第三十一話

「さあ、ヴェルナー。私達の部屋にもどろろ」

ヴェルナーは引きつった笑みを浮かべると、クリスにひきずられるように部屋に戻っていった。

サターンの改装が始まってひと月あまり、クリスはヴェルナーの私室で寝泊まりするようになった。初めのうちはヴェルナーも追い返していたが、ついに根負けし、この美貌の同居人を受け入れるようになった。

もつとも、二人の間に男女の関係はなかったのだが。クリスとヴェルナーが部屋に戻っていく様子をナオは憎々しげに、見つめていた。

「よろしいのですか？ 参謀長。司令官が技術少将閣下にとられてしまいますぞ」

サターン艦長のブラウン中佐が話しかけて来た。彼の言葉にナオは赤くなつた。

「と、とられるも何も、ヴェルナーは仕事上の相棒よ。ただ、それだけなんだから。それに今回の事はクリスより、普段からはつきりしないヴェルナーが悪いのよ」

「そうですねあ、司令官はその性格ですから。ここは参謀長がしっかりしないと……いけませんかな」

軍服を着ていなければ、「喫茶店の店主」とあだ名されているブラ

ウンがいたずらっぽく笑った。

「もう、艦長も違うって言っているのに。明日も早いんだから。艦長もしっかり休息をとっておくのよ」

ナオは耳まで真っ赤にしながら足早に部屋へと戻っていった。ブラウンは小さくため息をついた。

第三十二話

訓練を二ヶ月前に控えた新帝国暦二一年一〇月二四日、ヴェルナー艦隊飛行隊長である、エーリツヒ・フォン・アデナウアー少佐はフエザーンにある帝国軍軍務省航空工学研究所に降り立った。

ひと月前、新機体の受領と訓練の命令を受け、帝都フエザーンに一時出向となったのだった。

ミーティングルームに入ったアデナウアーは驚いた。いや、彼ならずとも、戦闘艇乗りならば、驚かすにはいられない光景だった。ミーティングルームにはオールスターゲームさながら、帝国軍の名だたるエースパイロットが集められていた。

「エーリツヒ？ エーリツヒじゃないか！？ 生きていたのか？」

後ろからアデナウアーは声をかけられた。

「ミハイルか！？ ミハイル・バルクホルン！？ ははは、懐かしいな。ランベルツ艦隊以来じゃないか」

アデナウアーは旧知の友と握手を交わした。

ミハイル・バルクホルン少佐はアデナウアーと同年の空戦パイロットで、シップエースであるアデナウアーとは対照的に空対空戦技のエキスパートで八二機の撃墜数を誇る凄腕のパイロットだった。

「今日はいつだったんだ？ 帝国中のエースパイロットが集まっているじゃないか」

アデナウアーはミハイルに尋ねた。

「ああ、ケンプ中佐もきているぞ」

「帝都防空航空団のか。帝国軍のトップエースじゃないか」

ミハイルが指差した先にはグスタフ・イザーク・ケンプ中佐がいた。海賊討伐での戦功は他に比類なく、一二八機の撃墜数を誇り、現在では帝都防空航空団に所属し、フェザーンの防空任務についていた。

一同がそろったとき、ギュンター・ローゼンベルクが姿を現した。

第三十三話

「帝国軍トップエースの諸君、遠路はるばるようこそ。今回諸君らには新型ワルキューレの機種転換訓練を受けてもらう。二ヶ月後にはデモンストレーションを兼ねた模擬戦闘訓練をひかえている。諸君らの努力を期待する」

ギンターが窓を開けると、そこには新型ワルキューレの流麗な機体があつた。大気圏内行動を考慮にいれ、設計されたこの機体は流線型で構成され、各所に配置されたスラスタが宇宙空間の機敏な運動性能をもたらしていた。

「ワルキューレの機動性の前に沈められないと証明しようではないか」

ギンターは高らかに言つてミーティングを解散させた。ミーティングのあとアデナウアーはグスタフに声をかけられた。

「卿はどう思う?」

「今スペックを見ましたが、性能は今までのワルキューレとは次元が違います。戦力としては申し分無いかと」

「いや、そうではない。最終日の模擬訓練についてだ。俺にはあのギンター少将の思惑がからんでいると思わずにはいられないのだ」

「そんなことで上が動くとは限りません。考え過ぎではないでしょうか?」

アデナウアーは言った。彼は中央から離れた場所にあり、本人も公言してやまないがそうした政治ごとには全く興味、関心を持たなかった。そのため、アデナウアーはグスタフの懸念に興味を抱かなかった。グスタフはそんなアデナウアーを見透かしたのか、静かに頷いた。

「そうか、確かに卿の言う通りかもしれないな。まずは目の前の問題を片付けておくとしよう。それから、模擬戦闘訓練の相手は卿の艦隊だそうだ。彼らの戦術を知り尽くした卿の力が必要になるだろう。よろしく頼む」

「な、なんですって!?!」

グスタフの言葉に、アデナウアーの目の色が変わった。

対空艦隊であるヴェルナー艦隊に新型ワルキューレが挑む。勝つ事が出来れば、これ以上のデモンストレーションはない。アデナウアーはグスタフの真意の半分を理解した。

グスタフの懸念はもう一つの意味を持っていたがクリスを知らぬアデナウアーにはその懸念を知る由はなかった。

それぞれの思惑を秘め、新帝国暦二一年の秋は更けていった。

第三十四話

新帝国暦二一年二月二四日、改装が終了したサターンはランテマリオ星域の演習宙域に到着した。

演習に参加した艦艇はヴェルナー側二隻、対空戦艦サターンを中心に高速戦艦「ギャラハッド」「ガウエイン」「モードレッド」「ベデイヴィエール」他駆逐艦一六隻だった。

対するギンター側は新型ワルキューレ三〇〇機、指揮官はグスタフ・イザーク・ケンプ中佐、副官はエーリッヒ・フォン・アデナウアー少佐だった。

「なかなか、壮観なものだな」

新型コンピュータに換装され以前とは全く変わってしまった艦橋でヴェルナーは言った。

「そうだろう？ この私が設計したのだからな。それに、乗り心地も極上だろう？ ヴェルナー」

クリスがヴェルナーの腕に抱きついた。

「どうしてクリスがここに？ 安全な場所で観戦していると言ったのに」

「私はこの艦の改装責任者だぞ。データ収集や不足のアクセシビリティに対応するためにもここにいる必要がある。それが、小物のギンターと私の違うところだ」

クリスは豊かな胸を揺らしてのけぞるくらいに胸を張った。

ギユンターは安全宙域にある観測艦で戦闘訓練の様子を観戦していた。三〇〇機対二一隻。通常ならばまず艦隊に勝ち目はない。ギユンターはすぐにもたらされるであろう勝利に思わず笑みがこぼれた。

「ふふふ……。これでやっと、あの小生意気な女に一泡吹かしてやれるぞ」

ギユンターは前方に見えるサターンを見た。

サターンでは、クリスがヴェルナーの腕にくっついていた。ヴェルナーは何度か引きはがそうとしたが試みたが、最後にはクリスに根負けする形になった。ナオは抑揚を押さえた声で、ヴェルナーとクリスとの間に割り込んだ。

「司令官、少しお話があります。お時間をお取りしてもよろしいでしょうか？」

第三十五話

「構わない。俺の部屋で話そう」

一緒についていこうとするクリスを制して、二人はヴェルナーの私室に入った。部屋に入るなり、ナオはヴェルナーに切り出した。

「ヴェルナー、あの子どもするつもり？ 本当に結婚するつもりなの？」

「どうしたんだ？ ナオさん。今言う話では……」

「ごまかさないで！」

ヴェルナーの言葉をナオはさえぎると、扉を背に腕を組んだ。

「大事な話よ。クリスにとっても、私にとっても、あなたにとっても。あなた、いつもごまかして逃げてばかりじゃない。そんな人と私は一緒に戦う事はできないわ」

「ナオさん……」

いつもとは違う参謀長の様子にヴェルナーは驚いた。ヴェルナーは直接ナオの方を見ようとはせず、眼鏡を外し、レンズを拭きながら言った。

「ナオさん。クリスは確かにすてきな女性だよ。だけど、彼女と結婚するつもりはないよ」

「どうして？」

ナオの問いかけにヴェルナーは眼鏡をふき続けていた。彼にとっては、ただ意味のない、時間つぶしのようだった。ヴェルナーは私室の机を腰掛けにして言った。

「俺には大切な人がいるから、その人以外は女性を好きになるつもりはないよ。……ナオさんはどうして俺にそんな事聞くんだった？」

ヴェルナーは静かに言った。今度はナオがうるたえる番だった。

「だって、あなたは頼りないし、そんな男と一緒にになるとクリスが心配って言うか、仕事上の相棒だから、知っておかなくちゃって思うし、士官学校時代の腐れ縁で……あ、ほらカールやフランツに報告しないといけないし、その……先輩として、後輩の事は心配で……私……」

ナオ自身、自分でなにを言っているかわからなかった。感情と論理を制御しきることが、この時点のナオはできていなかった。

「その、だから、私……っ！」

ヴェルナーはナオに口づけした。ナオは目を見開いたがすぐに目を閉じ、ヴェルナーに身を預けようとした。だが、ほんの数秒後、ナオはヴェルナー突き飛ばして部屋を出て行った。ヴェルナーの私室にはヴェルナーと床に転がったヴェルナーの眼鏡が残されていた。

艦橋への廊下で無機質な白い壁を背にもたれ、ナオは指で自分の唇をなぞった。唇にはヴェルナーの唇の感覚がまだ残っていた。ナオは心臓の高鳴りを押さえる事が出来ず、壁にもたれ続けていた。

第三十六話

ナオが艦橋に戻った時、ヴェルナーはすでに陣形の指示を出し始めていた。訓練開始時刻が迫ると、ヴェルナーはマイクをとり全軍に檄を飛ばした。

「諸君、新しいヴェルナーサーカスのお披露目だ。相手はトップエース三〇〇機、誠に光栄なことこの上ない。だが我々は彼らを打ち破る。我々の前に撃墜出来ぬ戦闘艇はないということを教えてやる。さあ、サーカスの始まりだ！」

艦橋で、銃座で機関部で、そして艦隊全体でに歓声が響き渡った。

新帝国暦二一年一月二四日午後一時模擬戦闘訓練が開始された。まずはアデナウアーと並び称されるほどのシップエース、ロベルト・プロイチエン少佐率いる第一波攻撃隊がサターンの輪形陣に襲いかかった。

「データ諸元をギャラハッドに転送、ヴェルナーサーカス発動！」

我先に突出した攻撃隊がミサイルとビームの洗礼を受けた。エースぞろいのワルキューレ隊は巧みにミサイル攻撃をかわしたが、執拗で正確な射撃によって次々と撃墜され、一〇〇機いた編隊はわずか三分で三四機に減らされた。

「こんなことつてあるのか!？」

撃墜を示す赤いスクリーンが表示されたワルキューレの中で、第一波攻撃隊のミハイル・バルクホルンは叫んだ。空戦機動に絶対的な

強さをもつ彼も、ミサイルとビームの時間差攻撃に敗れ去っていた。クリスはヴェルナーサーカスの弱点をコンピュータの相互リンク不足によるタイムラグと考えていた。サターンのコンピュータは旧型のため、演算と転送に時間がかかり、次の攻撃までの間にわずかながら空いてしまっていた。

クリスは新型コンピュータを導入することでデータの転送と演算をより速くさせただけでなく目標の個々の予測位置すらも各艦に行き渡らせるようにさせたのだった。

また、ナオとヴェルナーもそのタイムラグを克服するためにミサイルとビームの時間差攻撃を編み出した。単にミサイルとビームの攻撃だけではかわされる。

ミサイルで正確に狙いつつも、かわされたときに回避不可能なタイミングで中性子ビームで打ち抜く絶妙のタイミングを見つけるために二人は三ヶ月の時間を費やした。

第三十七話

アデナウアーは旧ヴェルナーサーカスの弱点を知っていたため、攻撃隊には波状攻撃を徹底させていたが、見事にヴェルナーによって打ち破られてしまった。

「第一波攻撃隊、全滅しました」

オペレーターの報告にヴェルナーは頷いた。

「さすがエースパイロット。前のサターンならやられていたな。それともアデナウアーの策か」

ヴェルナーはワルキューレ部隊と自分の艦隊の陣容を見て、陣形を転換させた。

「ギャラハッド、ガウエイン、モードレット、ベティヴィエール隊を前に出せ。前方から来る敵機に備えるんだ」

ヴェルナーの陣形変換に対して、ワルキューレは全機で攻撃を仕掛けて来た。

「編隊全機、馬鹿正直に前から攻めるな。乱戦に持ち込めば勝機はある」

アデナウアーは自分の率いる編隊に言った。ヴェルナー艦隊からはミサイルとビームで出来た無数の花が開いていた。グスタフ率いる部隊は全力で艦隊前方に攻撃を加えて、アデナウアー隊がサターンに襲撃する時間を稼いだ。グスタフ隊は、多大な損失を出しながら、

アデナウアー隊の突入を助けることに成功した。

サターンに前方の護衛部隊を突破した約六〇機が襲いかかった。

「対空砲、斉射！」

ブラウンの命令一下、対空砲が一斉に火をふき、一度に十数機のワルキューレを撃墜した。その様子を射程ぎりぎりの場所で見っていたアデナウアーは口笛を吹いた。

「さすがブラウン艦長。だが、これならどうですか？」

アデナウアーは自分の部隊に球状包囲を命じた。四〇機以上の波状攻撃。通常の艦ならば撃沈の運命は決まったようなものだった。ヴェルナーは戦域全体の陣容を見ると、後ろのナオを見ずに言った。

第三十八話

「参謀長！ 任せていいか!？」

ナオはヴェルナーの真意をすぐに理解した。ナオは微笑むと黒髪の司令官に言った。

「ええ。ぶちのめしてやりなさい！ ヴェルナー!」

ヴェルナーは振り向くと、ナオの手を叩いて、バトンタッチしてオペレータ席に向かった。その様子をクリスは寂しそうなまなざしで見つめていた。ヴェルナーはマスターコンソールに座ると瞬く間に照準を合わせた。ナオは艦隊陣形の変更を命じた。

「ガウエイン、ギャラハッド隊は前方の編隊を掃討。モードレッド、ベティヴィエール隊は反転、サターンの撃ち漏らしを片付けなさい」

全ての攻撃の態勢が整ったのはワルキューレがほぼ逃げることが出来ない状況が作り上げられた時だった。

そのことにいち早く気づいたアデナウアーは舌打ちした。

「この陣形は……まずい!」

「どうした?」

グスタフがアデナウアーに聞いた。

「うちの司令官が本気になりやがった!」

アデナウアーが言うが早いか、ナオの号令が放たれた。

「ファイヤー！」

ヴェルナーの正確無比な射撃がサターン攻撃隊のすべてを射抜き、ヴェルナーサーカスはグスタフ隊のワルキューレを包み込んで全機撃墜した。

「ばかな……ありえない……こんなことが……」

ギンターは観測艦の椅子から崩れ落ちた。

こうして、新帝国暦二二年二月二四日、午後三時三〇分、新型ワルキューレと対空戦艦サターンの模擬戦闘訓練はヴェルナー艦隊の圧倒的勝利で幕を閉じた。

最終話

新帝国暦二二年一月一日、惑星ウルヴァシーの補給基地で最終調整を行ったサターンは惑星ガレスの警備艦隊基地に向けて離陸しようとしていた。

「卿には世話になった。ありがとう。クリス」

ヴェルナーはクリスに手を差し出した。

「お前のためだ。ヴェルナー。最高の艦に仕上がったろう？ それから、結婚は取りやめにしよう、ヴェルナー。どうやらお前には別に相応しい女がいるようだからな」

クリスはそう言うとナオを見た。ヴェルナーは頬を赤らめた。

「私はコンピュータの専門家だぞ。お前たちの様子なんか、私に筒抜けだ」

「見ていたのか!？」

ヴェルナーはうわずった声をあげた。クリスはヴェルナーの耳元に口を寄せた。

「だから、早くナオに想いを伝えてやれ。でないと、私がお前を押し倒してやるぞ」

クリスの一言にヴェルナーは吹き出した。

クリスはナオに握手を求めた。ナオは笑ってクリスと握手を交わした。そこに初対面の時のような険悪な様子はなく親愛に満ちた握手だった。

クリスはヴェルナーの時と同じようにナオの耳に唇を近づけると、何かささやいた。ナオは耳まで真っ赤になるとクリスは笑い、再びヴェルナーのところにやって来た。

「また、私の力を必要とする時はいつでも来い。力になってやるぞ。ヴェルナー」

「ああ。その時はよろしく頼むよ、クリス」

新帝国暦二二年一月一〇日午後五時、ヴェルナー・テンシユテット大佐率いる戦艦サターン以下二〇隻は惑星ウルヴァシーの帝国軍補給基地を離陸した。

「ねえ、ヴェルナー。さつきクリスになにを言われたの？」

ナオはヴェルナーに言った。指揮シートに腰掛けたヴェルナーはサターンの全天周モニターが映し出す星の海を見ながら返した。

「秘密……かな。ナオさんは？」

ヴェルナーがナオの方に顔を向けるとナオはあわてて前を向いて言った。

「私も秘密よ！ ……それより、ヴェルナー。……ちよつと」

ナオは指で手招きした。ヴェルナーは怪訝そうに身体をナオの方に

のばすと、ナオから鉄拳が飛んで来た。

「痛いな！ ナオさん。なにをするんだ!？」

いきなりのげんこつにヴェルナーは抗議した。

「私の唇を奪った罰よ。これだけで済んだのだから良かったと思いなさい」

痛そうに頭をさするヴェルナーにナオは小さくつぶやいた。

「今度はちゃんと気持ちを打ち明けてから奪いなさい。そうしたら、私は……」

「ナオさん？ 何か言ったか？」

涙目のヴェルナーがナオに尋ねた。

「ううん！ 何でもないわ。何でも……」

ナオはひと際大きな声でごまかした。二人の眼前には幾万の星が輝いていた。この星の下、ナオとヴェルナー、二人は戦い続けていくであろう。金色の獅子の旗を掲げて。

銀河の歴史がまた一つ紡ぎあげられていく……

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6034j/>

銀河英雄年代史外伝シリーズ サターン改装計画

2010年11月9日10時16分発行